

食文化は異文化理解の良い切り口となれるか

3年1組6番 猪口真秀
3年2組1番 市川美百合

Keyword: 「食文化」「異文化理解」「在日外国人」「フードロス」「きっかけ」

1. はじめに

私たちは、日本に住む外国人であることによって受けた差別の経験や、もともと文化の盗用について興味があり盗用する背景はどんなものなのかを調べていた中で異文化理解の大切さや外国人差別の重大さについて知った。

在日外国人に対する差別や偏見が現代社会では問題となっていると考えた。外国人差別や偏見が未だにある理由として、海外の文化や人々をよく知らないまま敬遠していると考えた。SNSが発達している現代の社会では当たり前のように海外の文化に触れることが出来る。また、日本に住んでいる私たちも簡単に自国の文化を発信することが出来る。しかし、簡単に触れたり発信できることによって偏った情報だけを得てしまうという弱点がある。その偏った情報だけを手に入れそのものだけを信用し、外国人に対して偏見を持つてしまうのは仕方がない。では、より詳しく海外について知つてもらうことが出来ればいまよりも差別や偏見を減少させることができるのでないだろうか。そこで、私たちはより外国人が身近に感じられ知ろうと思えるきっかけを作ろうと考えた。

2. 序論

私たちの研究の目的は異文化理解を深めることである。

そこで異文化理解という難しい課題に対して身近な食を通して深めることはできるのだろうかという問いを立てた。

実際に行った研究の内容は以下の二つである。

- ①奈良サンリウムにてニラパイの模擬店を出店
- ②ブラジルから来た留学生、ナタリア・サコネさんを交えて学校でブガディロというブラジルのチヨコのスイーツを作り、試食体験



①の研究では市川の故郷である中国の東北地方でよく食べられているニラパイ(中国語では韭菜盒子)を奈良サンリウムにて模擬店で出店した。そこで左記のポスターを模擬店の前に出し、ニラパイを買ってもらう度にポスターと同じ内容のチラシを配った。そこにQRコードを貼り付けアンケートに協力してもらった。質問内容は以下の通りである。

1. ニラパイの味の感想
2. 中国に対してどんなイメージがあるか
3. 異なった場所生まれ、異なった文化を持つ人と理解し合えるためにはどんなことが大切だと思いますか？

②ブリガディロ手作り体験



この探究では、中学生から高校生の異文化交流やお菓子作りに関心のある人々を募集して、留学生との交流も兼ねたお菓子作りイベントを企画し開催した。ブラジルの伝統菓子であるブリガディロを通してブラジルの文化を身近に感じもらうことを目標として行い、16人の高校生が参加した。本プロジェクトでは、ブラジルの文化を体験的に理解すること目的に、「ナチと作る！本場ブラジルスイーツ体験」を実施した。ブラジルからの留学生ナタリアを講師として招き、ブラジルの代表的なお菓子「ブリガディロ」と一緒に作るワークショップを行った。参加費は100円で、材料費に充てた。活動中はお菓子作りを通して自然な会話が生まれ、ブラジルの文化や言語について学ぶ機会を提供した。また、活動後にアンケートを実施し、参加者の満足度や文化理解への影響を調査した。



3. 本論

①の結果

当初70個販売予定だったが想定の2倍程度の150個売れたが、アンケートに答えていたいだいた方の人数がたったの2人であったため、アンケート結果に偏りがあった。

中国に対して、中華料理や人口の多さ、賑やかな雰囲気などの印象があり、パンダや多様な美味しい料理もイメージとして挙がる。一方で、水産物の輸入規制など政治面でのマイナスの印象もある。異なる文化を持つ人同士が理解し合うためには、すぐに仲良くなるのは難しいため、少しずつ文化を知る機会を増やすことが大切である。たとえば、伝統衣装の体験や奈良サンウリムのような交流イベントに参加し、お互いを知ろうとする姿勢が重要であるというアンケート結果が得られた。

分析と考察

このアンケート結果からお互いの文化を知り交流していくことが大切であると考えられていると分かる。その点だけ言えば、食文化を通して異文化交流することは異文化理解に通用すると言える。

しかし、食文化だけでなく服や文化を知ることや交流を通して相互理解できるようになるのではないかというアンケート結果が出た。

この結果から食文化では他の国についてよく知るには少し不十分だが、食文化に触れ実際に作り、食べることでそのほかの文化を知ろうと思えるきっかけになると分かった。

②の結果

アンケート結果から、参加者の多くが「楽しかった」「また参加したい」と回答しており、全体的に高い満足度が得られた。一方で、当初設定した質問項目の一部が、プロジェクトの目的(食文化を通して異文化理解)と十分に対応していなかったことが課題として明らかになった。この反省を踏まえ、追加で参加した高校3年生6名に聞き取り調査を行った。その結果、6名全員が「食文化は異文化理解の良いきっかけになる」と回答し、また「実際に体験することで異文化への興味が深まった」と述べた。これにより、食文化を「体験型の学び」として用いることの有効性が示唆された。

分析と考察

アンケートおよび聞き取り調査の結果から、多くの参加者が「食文化を通じて異文化をより身近に感じられた」と回答した。特に、実際に手を動かして作る体験を通して、ブラジル文化への理解や関心が高まったことが確認できた。一方で、当初のアンケート項目は「楽しさ」や「満足度」を中心とした内容であり、プロジェクトの目的であった「食文化による異文化理解」との関連が十分に測定できなかった。このことから、目的と評価方法の一貫性に課題があることが明らかとなった。また、予想以上に参加希望者が多かったため、材料が不足し、全員が参加できなかったという運営面での問題も生じた。このことは、企画の魅力が高かったことを示す一方で、事前準備と参加人数の調整が今後の運営改善点であることを示している。本プロジェクトの結果から、食文化は異文化理解を促進する効果的な手段であることがわかった。

五感を使った「体験型の学び」は、言語的知識や講義型の学習よりも、参加者の興味や感情に直接働きかけ、異文化へのポジティブな印象を形成しやすいことが確認された。一方で、活動目的の明確化とそれに対応する評価指標の設定が不十分であったこと、また実施における人数制限や材料不足といった運営上の課題も浮かび上がった。今後は、目的に即した質問設計や、参加者数と準備物の管理などを改善することで、より多くの参加者が公平に異文化体験を得られるプログラムへ発展させることが期待される。

4. 結論

近年のグローバル化により偏見や差別の現状を目の当たりにすることが減少してきている現状だが未だに差別は残っている。そこで実際に差別を受けた経験を伝えるだけでなく根本的な原因を解決すべきだと考えた。そこで私たちの探究では食文化に触れられる機会を作った。この2回の検証で食文化は完全な異文化理解には出来ないが、外国に対して良い印象を与え異文化に興味を持つきっかけを作ることはできることがわかった。特に、2回行った試食や調理などの五感を使う体験型の検証では参加者の興味をひくことでより好印象を与えることができた。食文化だけで異文化を十分に理解することは難しいが伝統衣装の体験や交流イベントなどの他の文化を交えた体験を作ることでより深い理解に繋がることが検証を通してわかった。今回のイベントでは参加人数と準備するものを管理しきれず失敗に繋がってしまった。次の機会には、管理を徹底して行いたいと思う。

今後の課題としては、自分自身も海外に対する理解が曖昧な場面があったのでまずは自分の知らない海外の文化の理解を深めるべきだと考える。その他にも、模擬店を開催してもそこには既に異文化理解に興味のある人が参加してくれるので元から全く興味がない人を対象に検証を行い理解が深まったのか調べることが出来なかったのでどうすればより良い交流会を作ることが出来るのか考える必要がある。

5. おわりに

「異文化理解」は最近多様化が進む世の中によく耳にするようになった言葉だが、その重要性は私たちがそれぞれ理解していると思っていたものの、いざ他の人に異文化理解をしてもらおうとなると、何をもって異文化理解が深まったとするか、などいろんな問題に直面した。グループで練ってきたプロジェクトのアイデアを実行し行動を起こせたことが自信につながった。反省する部分も多かったが、プロジェクトを実行したからこそ知れた結果ができたことから、失敗を恐れず挑戦することの大切さを身をもって実感した今回の経験を通して、私は文化を体験としてデザインし、人に伝える力の重要性を学んだ。今後は異文化理解を促す企画をさらに発展させ、地域と世界をつなぐ役割を担いたい。

6. 参考文献

「在日外国人のエスニック・ビジネス —国籍別比較の試み—」樋口直人(徳島大学)
https://researchmap.jp/read0191792/published_papers/17724969/attachment_file.pdf

Discrimination Against Foreigners of Japanese Descent in Japan JIRO SUZUKI AND
MICKEY SAKAMOTO

https://brill.com/edcollchap/book/9789004638037/B9789004638037_s012.xml